metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by
provided by Kwansei Gakuin University

主の祈りと頌栄

The Lord's Prayer and the Doxology

原　　真　和*

Abstract

The Lord's Prayer of the Protestant churches includes the doxology whereas that of the Roman Catholic Church does not. Now, where does that difference come from? And, is there any theological significance in that difference?

The Lord's Prayer is based on Chapter 6, Verses 9–13 of the Gospel according to Matthew and many of the modern versions of the Bible do not have the words of doxology in that passage. However, Luther's translation and the King James Version did have those words of doxology in the same passage, for the biblical translators in the Reformation period used the Greek New Testament edited by Erasmus and it had the doxology following the Lord's Prayer. Protestant leaders taught the Lord's Prayer as was written in their Bible. In fact, Erasmus used a lot newer manuscripts than those that Jerome, who translated the Vulgate, had used. The Vulgate does not have the doxology and modern biblical scholars widely agree that the original Gospel according to Matthew did not have the doxology following the Lord's Prayer.

Thus the Lord's Prayer of the Protestant churches accidentally came to have the doxology. It is always very important to pursue a better translation of the Lord's Prayer that more people can say in unison.

キーワード：主の祈り、頌栄

「主の祈り」

「主の祈り」は、イエスが教えた祈りとして、親しまれ、大切にされてきた。イエスがこの祈りを弟子たちに教えたときの様子を、「ルカによる福音書」は次のように記している。

> イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と言った。そこで、イエスは言われた。「祈るときは、こう言いなさい。『……』」[1)]

「主の祈り」の言葉は「マタイによる福音書」にもあり[2)]、そちらに由来する言葉が、「主の祈り」として、古代より世界中のキリスト教の共同体において祈られてきた。現在、聖公会以外の日本の多くのプロテスタントの共同体では、「1880年訳」とされる次のような言葉でもって祈られている。

> 天にます我らの父よ、
> ねがわくはみ名をあがめさせたまえ。
> み国を来らせたまえ。
> みこころの天になるごとく
> 地にもなさせたまえ。
> 我らの日用の糧を、今日も与えたまえ。
> 我らに罪をおかす者を　我らがゆるすごとく、
> 我らの罪をもゆるしたまえ。
> 我らをこころみにあわせず、
> 悪より救い出したまえ。
> 国とちからと栄えとは
> 限りなくなんじのものなればなり。
> アーメン[3)]。

* Masakazu HARA　聖和短期大学教授　S. T. M.

1）ルカによる福音書11:1–4より。『聖書　新共同訳』（日本聖書協会、1999年）。引用箇所にある「ヨハネ」とは、イエスに洗礼を授けた洗礼者ヨハネのこと。

2）6:9–13.

3）日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌21』（日本基督教団出版局、1997年）、148頁、93－5－A.

この言葉は、その大部分が1880年の「明治訳」と呼ばれる日本語訳聖書に由来していると考えられるが、「国とちからと栄えとは限りなくなんじのものなればなり」という頌栄の部分は、どこから来たものなのか、はっきりしない。また、この言葉を日本語の「主の祈り」として誰が、いつ、どこで制定したのかも不明である。しかし、この言葉が、聖公会以外の日本のプロテスタントの共同体では、非常に普遍的に、エキュメニカルに[4]、用いられてきた。その意義は認めなければならないであろうと思われる[5]。

しかし、この「主の祈り」について、今橋朗は次のように述べている。

> 友人に誘われて、子どもが初めて教会学校に行ったときに感じる大きな驚きは、皆が声を合わせて難しい祈りを唱えることだ、と言われる。学校で一緒に勉強したり遊んだりしているいたずらっ子の友だちが、教会ではすらすらと、よく意味のわからない、しかもかなり長い祈りを暗唱しているのである。……強い違和感と興味、その友だちへの尊敬の念などが交錯することであろう[6]。

私も、小学３年生のとき、同様の経験をした。私の場合は、興味や尊敬よりも違和感が勝り、それだけが理由ではなかったのであろうが、結局、教会学校に行かなくなった。

聖書は、「神の言葉」として、キリスト教の共同体において親しまれ、大切にされてきた。「神の言葉」という表現の一つの意味は、神、すなわち、自分を超えた、他なる者と向き合って生きた人々の言葉である、と言うことができると思う[7]。聖書の言葉が、ただ単に過去の言葉、私たちとは関係のない言葉ではなく、今も生きている言葉、今ここに生きている私たちに語りかけてくる言葉となるためには、今ここに生きている私たちの言葉に、絶えず新たに翻訳し直される必要がある。「主の祈り」の言葉についても、同様のことが言える。「主の祈り」が、単なる過去の言葉ではなく、また、意味を考えずにただ唱えるだけの決まり文句ではなく、私たち自身の心からの祈りの言葉となるためには、私たち自身の言葉に翻訳し直される必要がある[8]。

実際、「主の祈り」の口語化の試みは、すでに行なわれている。その一つに、「教会音楽祭委員会訳」と呼ばれるものがある。これは、1968年から東京でほぼ毎年行なわれている教会音楽祭で、異なる教派の人たちが同じ「主の祈り」を祈りたいという願いから生まれたもので、会衆の声がそろうように、司会者（先唱者）が「天の父」と先に言うように工夫されている。もう一つの口語化の試みとして、「日本キリスト教協議会統一訳」あるいは「NCC 訳」と呼ばれるものがある。これは、NCC（＝日本キリスト教協議会）信仰職制委員会において作成され、1971年の NCC 総会で承認され、確定されたものである。これらの２つの口語の「主の祈り」は、「1880年訳」のものとともに、日本キリスト教団[9]の『新しい式文』（1990年）に収められ、さらに『讃美歌21』（1997年）に収められた[10]。

聖和の学校礼拝では、これらの口語の「主の祈り」を用いてきた[11]。しかし、教会の現場では、教会学校を含めて、あまり普及していないのが実状であろう。また、教会でこれを積極的に使おうとしても、暗記していないために、祈っているというより、読んでいるという感じになりがちであるという指摘もある[12]。

『こどもさんびか　改訂版』（2002年）は、「1880年訳」と上記の２つの口語訳に加えて、「日本聖公

4）「様々な異なる教派において」という意味。ただし、ここでは、プロテスタントの内部においてそうであるということ。
5）原恵、佐藤邦宏、熊澤義宣「座談会　私たちに祈ることを教えてください　日本語の主の祈りを考える」22頁、『礼拝と音楽』第99号（1998年秋号）。この座談会の司会は今橋朗であった。なお、小林恵「主の祈り、主祷文」173頁、今橋朗、竹内謙太郎、越川弘英監修『キリスト教礼拝・礼拝学事典』（日本キリスト教団出版局、2006年）にも、同様の趣旨の記述がある。
6）今橋朗「主の祈りをめぐって」４頁、『礼拝と音楽』第99号（1998年秋号）。
7）「聖書は神の言葉である」という表現の意味については、岩島忠彦『イエスとその福音』（教友社、2005年）の説明が優れている。なおかつ読みやすい。とくに第一章Ｖ。
8）土屋吉正「キリスト教の礼拝における主の祈り」8-12頁、『礼拝と音楽』第99号（1998年秋号）。
9）正式には「日本基督教団」。
10）原恵、佐藤邦宏、熊澤義宣、前掲文献、23-24頁。『讃美歌21』148-149頁、93-5-C および93-5-B.
11）聖和大学および聖和短期大学。保育の現場で「主の祈り」を用いることが適切かどうかは、別に考察すべき問題である。
12）原恵、佐藤邦宏、熊澤義宣、前掲文献、24頁。

会／ローマ・カトリック教会共通口語訳」と呼ばれるものを載せるという英断を下した[13]。この「主の祈り」が日本のローマ・カトリック教会で用いられるようになったのは、2000年である[14]。制定されたのは、上記の「教会音楽祭委員会訳」や「NCC 訳」のほうが早かったのだが、普及という点からは、教会制度の違いもあって[15]、「日本聖公会／ローマ・カトリック教会共通口語訳」のほうが、よく普及している。『こどもさんびか　改訂版』に掲載されている「日本聖公会／ローマ・カトリック教会共通口語訳」は次のとおりである。

天におられるわたしたちの父よ、
み名が聖（せい）とされますように。
み国が来ますように。
みこころが天に行われるとおり　地にも行われますように。
わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください。
わたしたちの罪をおゆるしください。わたしたちも人をゆるします。
わたしたちを誘惑におちいらせず、
悪からお救いください。
国と力と栄光は、永遠にあなたのものです。
アーメン[16]。

「主の祈り」に付加された頌栄

キリスト教の共同体において、古代より大切にされてきた「主の祈り」は、「マタイによる福音書」6章9–13節に由来している。現行の聖書を開いて、その箇所を確認してみると、実際に用いられている「主の祈り」との間に違いがあることに気づく。すなわち、「国と力と栄光は、永遠にあなたのものです」という頌栄の言葉が、聖書にはないのである。実は、ローマ・カトリック教会では、「主の祈り」は「悪からお救いください」で終わるものとされていて、「（エキュメニカルな集いなどで、頌栄を続けて唱える場合）国と力と栄光は、永遠にあなたのものです」と付記されている。このことから、次のような疑問が、当然、生じてくる。すなわち、なぜこのような違いが生じたのだろうか。そして、その違いにはどういう意味があるのだろうか。

「主の祈り」に関する書物は、日本語でも多数出版されている。そのすべてを見たわけではないが、私が見た範囲では、当然のことながらローマ・カトリックの著者は、頌栄について触れていない[17]。他方、プロテスタントの著者は、頌栄が「主の祈り」の一部であることを既定の事実として扱っている。そして、頌栄が2世紀の付加であることを認めながらも、頌栄を付けて「主の祈り」を唱えることがいかに適切であるかを説いている[18]。さらに、ローマ・カトリック側が頌栄付きの「主の祈り」の言葉を承認したことを評価する声もある[19]。頌栄付きの「主の祈り」は、実際上、プロテスタントのアイデンティティーのように扱われている。しかし、プロテスタントではなぜ頌栄を付けなければならないのかということについては、私が調べた範囲の「主の祈り」に関する書物の中では、触れられていなかった。実は、プロテスタントの「主の祈り」に頌栄が付加された経緯は、聖書翻訳の歴史にある。

聖書における「主の祈り」

既に繰り返し述べているとおり、「主の祈り」の典拠は、「マタイによる福音書」6章9節の途中から13節までである。しかし、現行の「新共同訳」の聖書（1987年）では、頌栄の言葉は聖書本文には書かれていない[20]。信仰の根拠を聖書に求める聖書主義の原則を掲げるプロテスタントでは、現行の聖書

13）日本基督教団讃美歌委員会編『こどもさんびか　改訂版』（日本キリスト教団出版局、2002年）。
14）カトリック中央協議会のウェブサイトによると、2000年2月15日から使用が許可された。
15）プロテスタントの諸教会の多くは、会衆制や長老制という会議制をとっているが、ローマ・カトリック教会と聖公会は、司教制あるいは主教制をとっている。すなわち、後者のほうが上意下達的な意思決定システムなのである。
16）『こどもさんびか　改訂版』191頁、D.
17）一例を挙げるなら、レオナルド・ボフ『主の祈り』（教文館、1991年）。
18）数例を挙げるなら、大木英夫『主の祈り』（聖学院ゼネラル・サービス、1990年）、ウィリアム・バークレー（吉田信夫訳）『主の祈りに学ぶ』（日本基督教団出版局、1991年）、平野克己『主の祈り―イエスと歩む旅―』（日本キリスト教団出版局、2005年）、マルク・フィロネンコ（加藤隆訳）『主の祈り―イエスの祈りから弟子たちの祈りへ―』（新教出版社、2003年）、ヤン・ミリチ・ロッホマン『われらの父よ―主の祈り講解―』（キリスト新聞社、2001年）、等。
19）原恵、佐藤邦宏、熊澤義宣、前掲文献、23頁。また、小林恵「主の祈り、主祷文」173頁、今橋朗、竹内謙太郎、越川弘英監修『キリスト教礼拝・礼拝学事典』（日本キリスト教団出版局、2006年）にも、カトリック側が頌栄を唱えることに配慮していることを評価する記述がある。
20）『聖書　新共同訳』（日本聖書協会、1987年）。「共同」とは、プロテスタントとローマ・カトリックが共同で翻訳したという意味である。

にない言葉を「主の祈り」に付加して唱えており、「聖書と聖伝」を根拠とするカトリックでは、聖書のとおりに「主の祈り」を唱えていることになる[21]。

「マタイによる福音書」6章の「主の祈り」の個所に頌栄の言葉が書かれていないのは、「新共同訳」だけではない。いわゆる「口語訳」（1954年）においても、同様である。『日本語ヘクサプラ　六聖書対照新約全書』（エルピス、1994年）によると、いわゆる「文語訳」、すなわち、1917年の大正訳の時点で、既に頌栄の言葉は書かれていなかった。

しかし、いわゆる「明治訳」すなわち1880年の訳では、「マタイによる福音書」6章13節に頌栄の言葉が書かれていた。1880年訳の聖書の「マタイによる福音書」6章9～13節は以下のとおりである。

> 然（され）バ爾曹かく祈るべし天に在（まし）ます我儕（われら）の父よ願くハ爾名（みな）を尊崇（あがめ）させ給へ爾國（みくに）を臨（きた）らせ給へ爾旨（みこゝろ）の天に成（なる）ごとく地にも成（なさ）せ給へ我儕（われら）の日用の糧を今日も與（あたへ）たまへ我儕（われら）に罪を犯す者を我（わが）ゆるす如く我儕（われら）の罪をも免（ゆるし）たまへ我儕（われら）を試探（こゝろみ）に遇（あは）せず悪より抜出（すくひいだ）し給へ國と権（ちから）と栄（さかえ）ハ爾の窮（かぎり）なく有（たもち）たまふ所なりアーメン（原文においては、下線を付したひらかなは、異字体のひらかなになっている。一部の漢字は新字体に改めた。）[22]

これを見ると、「1880年訳」と呼ばれる現行の「主の祈り」の大部分は、この箇所に由来していることがわかる。

いわゆる「新改訳」（初版1970年）には、頌栄の言葉が［　］付きで記されている。例えば、『聖書注解・索引・チェーン式引照付』（いのちのことば社、1981年）には、［国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです。アーメン。］という頌栄の言葉が［　］付きで記され、「最古の写本ではこの句は欠けている」という注が付いている。

実は、現行の正教の聖書にも、頌栄の言葉が書かれている。『日本正教会翻訳　我主イイススハリストスの新約』（正教本会版、1985年）の、「マトフェイに因る聖福音」第6章9～13は以下のとおりである。

> 故に爾等是くの如く祷れ。天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖（せい）とせられ、爾の國は来り、爾の旨は、天に行はるゝが如く、地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債（おひめ）ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘（いざなひ）に導かず、猶（なほ）我等を凶悪より救ひ給へ、蓋（けだし）國と権能と光栄は爾に世世に帰す、「アミン」。（一部の漢字は新字体に改めた。）

ヒエロニムス（Eusebius Sophronius Hieronymus, 340年頃～420年）が完成したとされるローマ・カトリック教会のラテン語訳聖書「ウルガタ Vulgata」では、どうなっているのか。「ウルガタ」は、1592年版（versio Clementina）等、いくつかの重要な校訂版を経て、1979年の「新ウルガタ（Nova Vulgata）」に至っている。Nestle-Aland, *Novum Testamentum Latine*（Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1984）は、その基礎の上に出版されている[23]。これによると、「マタイによる福音書」6章13節に頌栄の言葉はない。また、過去の版にそれがあったという表示もない。

英訳聖書においては、どうだろうか。1611年に出版された欽定訳（Authorized Version or King James Version）では、「マタイによる福音書」6章9～13節は以下のように記されていた。

> After this manner therefore pray ye: Our father

21）後で見るが、正教では、聖書に頌栄の言葉が書かれているにもかかわらず、頌栄を「主の祈り」の一部であるとは考えていない。

22）『日本語ヘクサプラ　六聖書対照新約全書』（エルピス、1994年）による。原恵、佐藤邦宏、熊澤義宣、前掲文献、23頁でも見ることができる。同所によると、「抜出（すくひいだ）し給へ」とある部分は、「拯出し給へ」の誤植であるという。

23）Nestle-Aland, *Novum Testamentum Latine*（Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1984）, Praefatio より。ちなみに、活版印刷技術の発明者とされるグーテンベルク（Johannes　Gutenberg, 1400年頃～1468年）が出版した聖書も、「ウルガタ」であった。

> which art in heaven, hallowed be thy name. Thy kingdom come. Thy will be done, in earth, as it is in heaven. Give us this day our daily bread. And forgive us our debts, as we forgive our debtors. And lead us not into temptation, but deliver us from evil: For thine is the kingdom, and the power, and the glory, for ever, Amen.[24]

このように頌栄の言葉が記されている。しかし、1952年に出版された Revised Standard Version では、頌栄の言葉は記されていない。1973年に出版された New International Version では、本文には頌栄の言葉が記されていないが、注の中に、“Or *from evil*; some late manuscripts *one,/ for yours is the kingdom and the power and the glory forever. Amen*.”と書かれている[25]。1966年に出版された Today's English Version は、1976年に Good News Bible と改題された。これにおいても、本文には頌栄の言葉は記されていないが、注の中に、“*Some manuscripts add* For yours is the kingdom, and the power, and the glory for ever. Amen.”と書かれている[26]。

ルター訳（1522年）においては、頌栄の言葉が記されていることが予想されるであろう。実際、そうなのである。

> Darum sollt ihr also beten: Unser Vater in dem Himmel! Dein Name werde geheiligt. Dein Reich komme. Dein Wille geschehe auf Erden wie im Himmel. Unser täglich Brot gib uns heute. Und vergib uns unsere Schulden, wie wir unsern Schuldigern vergeben. Und führe uns nicht in Versuchung, sondern erlöse uns von dem Übel. Denn dein ist das Reich und die Kraft und die Herrlichkeit in Ewigkeit. Amen.[27]

以上のことから何が言えるだろうか。プロテスタントの「主の祈り」に付加されている頌栄の言葉は、「ウルガタ」には見られない。しかし、ルター訳や欽定訳には、それが見られるのである。そして、現行の日本の正教の聖書にも、頌栄の言葉が見られる。これらのことを総合すると、宗教改革期の聖書翻訳者たちは、ギリシャ正教系のギリシャ語の新約本文を用いたのではないかという仮説を立てることができると思われる。実際、そうなのであった。

永嶋大典によると、エラスムス（Desiderius Erasmus，1466年頃～1536年）編のギリシャ語新約（1516年）は、ギリシャ語の新約本文の史上初の活字本であった。そして、エラスムス編のギリシャ語新約の第２版（1519年）こそが、ルター訳や、欽定訳の基礎となったティンダル訳の底本となったのであった[28]。

水垣渉によると、エラスムスは文献学者として、なるべく多くの、良質の写本を基礎にしようと考えたはずであるが、実際に用いたのは数種類の小文字写本であった。これらは12、13世紀の写本で、ビザンチン・テクストあるいはコイネー・テクストなどと呼ばれる、本文学上価値の低い本文を含むものであった。また、数種類といっても、新約全書を含む写本は稀であったので、書によって異なる写本を基にせざるをえなかった。「ヨハネの黙示録」の末尾、22章16～21節に至っては、ギリシャ語本文を得ることができず、「ウルガタ」から逆にギリシャ語に訳して、本文に入れている。エラスムスは比較的新しい小文字写本を基礎としたので、元来の本文にはない句や文が付加されている個所があるのである[29]。

以上のことから、次のようなことが言える。すなわち、プロテスタントの「主の祈り」に頌栄が付加されているのは、ルター訳や欽定訳などの、プロテスタントの聖書に、そのように記されていたからである。すなわち、プロテスタントの指導者たちは、聖書主義の原則に従って、彼らの聖書に書かれているとおりに「主の祈り」を教えたのであった。その

24）永嶋大典『英訳聖書の歴史　付：邦訳聖書小史』（研究社出版、1988年）、118-119頁。ただし、読みやすいように、現代の綴りに改めた。
25）例えば、*The Layman's Parallel Bible*（Grand Rapids, Michigan: The Zondervan Corporation, 1991）. New International Version のウェブサイトでも本文を見ることができる。
26）Bible Society のウェブサイトで Good News Bible の本文を見ることができる。
27）永嶋大典、前掲書、67頁による。*Die Bibel order die Heilige Schrift des Alten und Neuen Testaments nach der Übersetzung Martin Luthers*（Deutsche Bibelgesellschaft, 1972）では、頌栄の部分に〈　〉が付されている。ルター（Martin Luther，1483年～1546年）。
28）『エラスムス校訂「新約聖書」1516年初版復刻本　付録〈解説〉』（臨川書店、1989年）、1-10頁。
29）同書、11-17頁。

結果、プロテスタントの「主の祈り」には、頌栄の言葉が付加されることになった。しかし、ルター訳や、欽定訳の基礎となったティンダル訳が底本としたのは、エラスムスが編集したギリシャ語の新約本文であったが、それは、ヒエロニムスが用いたであろうギリシャ語本文よりもずっと後の時代の写本を基にしたものであった。現代の聖書学では、頌栄の言葉が元来の「マタイによる福音書」６章13節にはなかった可能性が高いと考えられている。その見解に基づいて、現代の聖書には、頌栄の言葉が記されていないものが多い。あえて記している場合は、注に記すか、本文中に［　］付きで記し、その部分が最古の写本にはないことを注に記している。

付加された頌栄の神学的な意味については、次のようなことが言える。すなわち、宗教改革の時代においては、自国語に翻訳された聖書への信頼に基づいて、「主の祈り」に頌栄を付加することが聖書に忠実であることを意味した。しかし、その後の聖書学の進展によって、頌栄を付加しないほうが聖書に忠実である可能性が高くなっている。

典礼における「主の祈り」

プロテスタントの著者による「主の祈り」に関する書物の多くは、古代の教会の典礼において、「主の祈り」に頌栄の言葉が結びついたことを指摘している[30]。実は、「主の祈り」と頌栄の結合は、現在のローマ・カトリックや正教の典礼の中にも認めることができるのである。

現在、日本のローマ・カトリック教会のミサは、通常、５つの部分から成るとされている[31]。すなわち、開祭（ritus initiales）、ことばの典礼（liturgia verbi）、感謝の典礼（liturgia eucharistica）、交わりの儀（ritus communionis）、閉祭（ritus conclusionis）である[32]。しかし、交わりの儀を感謝の典礼の一部としている場合もある。いずれにしても、感謝の典礼においてパンとぶどう酒と献金が奉納され、パンとぶどう酒がキリストの体と血に聖変化した後、交わりの儀に入っていくのであるが、交わりの儀の冒頭、すなわち聖体拝領前の平和を願う祈りと平和のあいさつの前に、「主の祈り」が一同によって唱えられる。現在、ミサにおける「主の祈り」の部分は、以下のようになっている。

司祭：主の教えを守り、みことばに従い、つつしんで主の祈りを唱えましょう。
会衆：（既に引用したローマ・カトリック教会の「主の祈り」を唱えるか、または歌う。ただし、典礼の中で唱える場合は「アーメン」を付けない。）
司祭：いつくしみ深い父よ、すべての悪からわたしたちを救い、現代に平和をお与えください。あなたのあわれみに支えられ、罪から解放されて、すべての困難にうち勝つことができますように。わたしたちの希望、救い主イエス・キリストが来られるのを待ち望んでいます。
会衆：国と力と栄光は、限りなくあなたのもの[33]。

「主の祈り」に続く部分、すなわち「いつくしみ深い父よ」以下、頌栄までを、「主の祈り」の「副文」と呼んでいる。ここに現れる頌栄の言葉は、プロテスタントの「主の祈り」に付加されている頌栄の言葉と同じ内容である。しかし、カトリック教会で、ミサ以外の場面で「主の祈り」を唱える場合は、頌栄を付けない。

現在、日本におけるギリシャ正教の教会、すなわち日本ハリストス正教会で用いられている『主日奉事式』と題された祈祷書は、土曜日の夜のための

30）一例を挙げるなら、大木英夫、前掲書、104–105頁。また、北村宗次「主の祈り」178–179頁、岸本羊一、北村宗次編『キリスト教礼拝辞典』（日本基督教団出版局、1977年）は、次のように述べている。「また結びの頌栄については、聖書にはなくて、最古の記録がディダケー（8:2）まで見いだされないが、ユダヤ教では祈りの結びに自由な頌栄句をつけるように、ほとんど当初から実際には付加されていたであろう」。なお、典礼における「主の祈り」については、「主の祈り」の典礼における位置の問題が指摘されている。すなわち、「主の祈り」は、元来は礼拝の前半で唱えられたものではなく、後半の聖餐式の部分で、陪餐に先立つ平和の挨拶の前に唱えられたということが指摘されている。今橋朗、「主の祈りをめぐって」5–6頁、『礼拝と音楽』第99号（1998年秋号）、小林恵「主の祈り、主祷文」172–173頁、今橋朗、竹内謙太郎、越川弘英監修『キリスト教礼拝・礼拝学事典』（日本キリスト教団出版局、2006年）、北村宗次「主の祈り」178–180頁、岸本羊一、北村宗次編『キリスト教礼拝辞典』（日本基督教団出版局、1977年）、などを参照。ここではこの問題には立ち入らない。
31）オリエンス宗教研究所編『ともにささげるミサ（改訂版）―ミサ式次第　会衆用―』（オリエンス宗教研究所、2000年）。
32）ラテン語は、芹澤雅夫編『Let's pray together at MASS：英文・ラテン文・和文・ローマ字文でのミサの式次第（第４版）』（カトリック松が峰教会、2000年）による。
33）例えば、芹澤雅夫編、前掲文献、17–20頁。

「徹夜祷」と日曜日の朝のための「聖金口（きんこう）イオアン聖体礼式」という２つの部分から成っている[34]。正教では、聖書の伝統に従って、主日は土曜日の夜から始まる。すなわち、土曜日の日没以降は日曜日であるという考え方に立っている。この「徹夜祷」と「聖体礼式」の中で、「主の祈り」は何度も唱えられるが、次のように唱えられる。

誦：天に在すわれらの父や、願わくは、なんじの名は聖とせられ、なんじの国は来たり、なんじの旨は天に行なわるるが如く、地にも行なわれん。わが日用の糧を今日われらに与え給え。われらに債（おいめ）あるものをわれらゆるすが如く、われらの債（おいめ）をゆるし給え。われらを誘（いざない）に導かず、なおわれらを凶悪より救い給え。
司：けだし、国と権能と光栄はなんじ父と子と聖神（せいしん）に帰す、今も何時も世々に。
誦：アミン。

「司」とある部分は司祭が唱える。「誦」とあるところは、信徒の先唱者が唱える。「誦」の代わりに「詠」となっている個所もあるが、その場合は、聖歌隊が歌う。ここに現れている頌栄の言葉は、プロテスタントの「主の祈り」に付加されている頌栄の言葉とは少し違っているが、「父と子と聖神（せいしん）」が付加されている以外は同じ内容であると言える。しかし、正教においても、「主の祈り」といえば、「天に在すわれらの父や」から「なおわれらを凶悪より救い給え」までを指している。

以上、現在の日本におけるローマ・カトリックと正教の典礼の中の「主の祈り」を見たわけであるが、ローマ・カトリックにおいても、正教においても、プロテスタントの「主の祈り」に付加されている頌栄とほぼ同じ内容の言葉が、典礼の中では「主の祈り」と結びついていることがわかる。しかし、それはあくまでも典礼において「主の祈り」に頌栄が結びついているということであって、ローマ・カトリックと正教においては、頌栄が「主の祈り」の一部であるとは考えられていない。

ちなみに、1990年版の『日本聖公会祈祷書』（第５版、1999年）によると、聖餐式の中で「主の祈り」は、陪餐の部分の冒頭で一同により唱えられる。祈祷書には、次のように記されている。

司祭は次の言葉を歌いまたは唱える。
司祭　救い主キリストが教えられたように祈りましょう。
一同主の祈りを歌いまたは唱える
（頌栄を含まない「主の祈り」の言葉）
続いて一同次の言葉を歌いまたは唱える。
（アーメンで終わる頌栄の言葉）

おわりに

今橋朗は次のように述べている。

「主の祈り」は、祈ることを知らない人類への神からの贈り物。……真実の言葉。幼い子どもや初心者にも触れてくるところのキリスト教との接点。しかも、理解されつくし祈り尽くされることのない、福音の秘義。すべての欠乏と欲求を包み込みつつ、すべてを越えていく翼[35]。

この論では「主の祈り」の内容には立ち入ることができなかったが、「主の祈り」は、きわめてシンプルな祈りである。そして、イエスらしい祈りである[36]。頌栄を付加しないほうが、聖書に忠実であり、シンプルであり、イエスらしいと思う。

キリスト教の共同体における和解と一致は、「ヨハネによる福音書」によれば、イエス自身の願いであった[37]。キリストの共同体が同じ言葉で「主の祈り」を祈ることができるように努力することは、非常に大切なことである[38]。土井吉正は次のように述べている。

主の祈りのことばは、子どもにも、子どもなりに分かり、その子どもなりの理解が絶えず深

34）この書物には奥付がないが、扉の次の頁に、「救主降生一九九四年　フェオドシイ府主教座下の祝福により印刷」と記されている。
35）今橋朗「主の祈りをめぐって」７頁、『礼拝と音楽』第99号（1998年秋号）。
36）この点については、中野実「そのとき、イエスはなにを祈ったのか：イエスにとって主の祈りとは？」14–18頁、『礼拝と音楽』第99号（1998年秋号）を参照。
37）例えば、ヨハネによる福音書17:21.
38）土井吉正「キリスト教の礼拝における主の祈り」11頁、『礼拝と音楽』第99号（1998年秋号）。

められて行って、繰り返されれば繰り返されるほど、さらに深く味わえるようなものであることが望ましい。

そのためには、絶えずより良いものを追及して、刷新を繰り返して行くことが何より大切なことなのである[39]。

プロテスタントは、伝統的に、「主の祈り」に頌栄を付加してきた。しかし、それは、直接的には聖書翻訳の歴史的経緯から、結果的にそうなったということであって、頌栄を付加しなければならない積極的な理由があったわけではなかった。もしそうであるならば、よりよい日本語の「主の祈り」を求めていく過程の中で、頌栄の問題を再検討し、頌栄を省く英断を下し[40]、イエスの祈りに回帰していくべきであると私は考える。

39）前掲文献、12頁。
40）頌栄の言葉そのものに深い意味があることを否定するものではない。私訳「支配すること、権力をふるうこと、賛美を受けることは、いつの時代にあっても、あなたにのみ帰すべきものです」。